

荻谷剛彦著『学力と階層』（朝日新聞出版、2008年）

学歴社会から、「学習能力」を柱とした学習資本主義社会へ

本書は、「教育の地殻変動」に対して、学力と階層の視点からその実態と今後の処方箋を説いた著作で、いわば教育問題の最前線に位置する問題提起の書である。テーマとして単なる学力格差を問題にしているのではなく、また、学力といった獲得された知識のストックの格差を問題視している訳ではない。著者の問題意識は、学習意欲や態度を含む「学習資本」の階層間格差にあり、その格差の固定と再生産における教育費の配分や教員の勤務実態の問題にまで視野を広げている。そして著者は、知識獲得のためのスキルや学習能力が重視される「学習資本主義社会」の到来を予見している。

それでは、そのすぐれた実態認識に対して、打ち出した処方箋はどの程度有効かつ実現可能なのだろうか。

本書の各章は、以下のタイトルとテーマで構成されている。

- 1章「階層で学力が決まるのか。学力が階層を作るのか」
  - ・・・授業の理解度、学習意欲には格差が存在しており、家庭的背景が学力に大きな影響を及ぼしている。
- 2章「義務教育の機会は平等に保たれているか」
  - ・・・教育基本法改正は地域格差をもたらしており、義務教育機会の不均衡化が経済格差を生んでいる。
- 3章「これが教員勤務の実態だ 教員勤務実態調査報告」
  - ・・・現場の声に耳を傾けずに進め、子どものために有効ではない教育改革。
- 4章「教育政策をめぐる論点、論争」
  - ・・・戦後教育の軌跡と現況、将来の課題。
- 5章「教育の綻びをどう修正したらいいか」
  - ・・・提言：学歴社会から学習資本主義社会へ。

学力低下が危惧される子どもの学力形成の背景に何があるのか。調査データの解析によって明らかにされたことは、子どもの学力が依然として親の職業や学歴など家庭的背景に強く影響を受けている実態である。そして、こうした社会的階層による学力や学習意欲の格差が拡大しているという。著者がしばしばこれまでの著書で指摘してきた、両親の所属階層による学習意欲・努力・誘因（インセンティブ）の格差（ディバイド）が縮小するどころか、さらに拡大している実態を徹底して指摘している。

特に近年の傾向として、少子化等による受験競争の緩和によって、学校の学力向上努力が弱まり、学力差が拡大したという。さらに、地方分権の「三位一体改革」による自治体への義務教育費国庫負担金の削減によって事態は一層悪化してしまった。過疎化や人口減少地域では、税収は増えないのに義務教育費国庫負担金の減額が響いたからである。そのため、義務教育財源にまで地域格差があらわれる事態となっている。

こうした大きな問題を抱えた教育を再生するのは容易なことではない。これに対し著者は、学歴社会から学習資本主義社会（学習能力を核とした人的資本の形成）への移行をめざした取り組みを地道に行うことが大事であると説いている。「学習能力」の育成、すなわち「自ら学び、自ら考える力」の育成＝「生きる力」の教育は、21世紀を生き抜くために必要な「問題発見・解決能力、コミュニケーション能力、創造性等」を育成するという。こうした「学習能力」の育成と獲得こそが求められていると主張している。

ところで著者は「学歴社会」の定義として、「過去に修得した知識や技術」が大きな価値を持ち、また高等教育終了後、固有の企業文化や職業スキルの獲得を通して昇進する社会として設定している。しかしこうした「学歴社会」が、生涯職業生活を保障するものではないことはすでに自明のことと思われる。求められるスキルは常に変化するからである。しかし圧倒的多数の人がこうした職業生活を選択せざるをえない中、雇用が流動化しているとしても、今後は否定すべきものだろうか。また「学習能力」の獲得に従来の職業生活が多大な貢献をしたことも否定できないだろう。職務経験を通して一定の「学習能力」が育成されてきたことは紛れもない事実だからである。

著者は、教育問題に対するすぐれた実態認識とともに、「学習能力」とその成果である人的形成が社会編成の要となる「学習資本主義」の到来を予見しているが、その社会を平等、均等に実現するための具体像、具体的方策までは明らかにしていない。著者も告白しているように、「難問との格闘が続くのである」。本書を読んで、実現することなく終わったかつての「柔らかな個人主義の誕生」論を思い出した。その本質は誕生、到来論ではなく待望論であった。

公立中学校の父母懇談会の席で、担任教師自らが「学校の勉強は入試問題のレベルに対応していません」と悲げずに放言する「現実」が存在する。保護者としては、よりハイレベルな学習機会の獲得のために、「学習能力」の育成が気になりながらも、ひとつずつステップアップさせるしかない。

藁科満治著『囲碁文化の魅力と効用』

ところで『連合築城』などの著作のある藁科満治氏が『囲碁文化の魅力と効用』（日本評論社、2008年12月）を出版した。藁科氏は言うまでもなく、労働界の指導者として活躍し、連合結成に多大な貢献をされた功労者である。しかし本書は、囲碁を愛してやまない著者が囲碁の効用と魅力、その歴史を縦横につづった著作である。いわゆる労働運動の記録ではなく、また内幕本ですらないため、残念ながらこれまでの著作と比べ労働界で幅広く読まれることはないと思われる。

しかし囲碁文化論及び人間教育論の視点からみると好著である。囲碁の起源と歴史について、囲碁の場面が多く出てくる『源氏物語』まで遡り、さらに、孔子、孟子の囲碁観にまで触れている点は、歴史小説好きの読者も新鮮な驚きを隠せないと思われる。

しかし普及という点から囲碁をみると、職場や組合事務所で囲碁や将棋に打ち興じる姿をみることはほとんどなくなった。また囲碁、将棋よりもテレビゲームにのめり込む青少年が圧倒的多数を占めていることも事実である。構想力、集中力、大局観、柔軟性などを養う囲碁の持つ魅力が注目され、教育現場に導入されるケースが増えているが、レスポンスの素早さに魅力を感じるテレビゲーム世代の青少年にどのように囲碁の魅力を訴えるか、この点が課題となるであろう。

藁科氏は本書で人間教育における囲碁の効用を強調している。「荒廃日本」を再生させ、「感じる」「思いやる」「相手の気持ちになる」といった感性を育む現場主義、体験主義に教育は比重を移すべきだという。そのための有効な手段こそが囲碁、囲碁文化の導入であると主張している。

ところで囲碁の世界では、石の打ち方をあらかず言葉として、「ノビ」「アテ」「ツギ」「ハネ」「アタリ」など、まったく何のコッチャわからんという言葉が普通に使用されている。囲碁のテレビ対局の解説でも、これらの言葉を注釈抜きで使用している。囲碁の素人にはまったく理解できない言葉遣いである。

しかしこれらの言葉を使用せずには、対局者がどのような石の打ち方をしているのかを説明するのは困難である。また囲碁のわかる視聴者にとっても、こうした言葉を使用しないと勝負のポイントがなかなかわかりにくい。囲碁の世界では、この点をクリアできれば、その先には奥行きが深い、純粹で無限の世界が展開している。

一方、労働組合の用いる用語、言葉も一般の人にわかりにくいというのが定説である。しかし労働界ではこうした言葉を用いて関係者のコミュニケーションを迅速化し、運動を展開、大きな成果をあげてきたことも事実である。組合用語を縦横に駆使し活用することによって、囲碁の世界と同様に、労働界も奥深い世界を構築してきたということであろうか。（西村博史）